

かつこいい普通の人々

定本清美

その人は引きつけられるようにピアノのそばにゆっくりと歩いてきた。白髪と品のいい顔つきの紳士、短い濃紺のコートの一番上のボタンを一つ外しながらピアノの前の椅子に腰かけた。落ち着いた表情で静かにピアノを弾き始めた。穏やかな響きが、駅のざわめきの中に小さく広がっていく。一曲ひき終わると、テレビの画面下に短い解説、インタビュ―が映った。九十一歳男性、字幕は続く、五十年間市場の中の花屋で働いていたという。そして「ピアノはずっと続けていた、音楽があつたから、人生を楽しく過ごせた」「この上なく幸運に恵まれた人生だった」と語って、そつと席を立て去っていった。NHKのBS「駅ピアノ」英国のある駅での一場面である。私は、見ながら号泣した。なんで涙がでるの、と人は言うかもしれない。それに的確に答えることはできないが、書いて言えば、普通の人の人生に感動したから、とでもいえるだろうか。普通の仕事で長い間精いっぱい働いた、普通の人、その人の穏やかで品のいい風貌。音楽の隠れた才能、そして、自分の人生をこの上なく幸運だったと語れる「人」に感銘を受けた。いや、今も感銘を受け続けている、思い出しただけでも涙が止まらない。意図したインタビューではなく、たまたま定点カメラに映った街の人が、さりげなくこんな風に言えるなんて、すごい。こんな人がたくさんいる国であれば、素晴らしい、カッコいい！

職業は様々であっても、自分の人生を真面目に生き、その中で自ら生きるための楽しみや教養を持ち、現実と向き合いながらうまく過ごしていく人生、普通の英国人の素晴らしいさ、カッコよさ、が目の前に再現してきた思いであった。

番組はさらに続き、今は労働的な仕事を失っているが、時々舞い込むピアノを弾く仕事で食いつないでいるという若者、年の離れた子供と一緒にボランティアで老人施設に慰問に行きピアノ演奏をするという親子、英国人女性とアフリカ系男性の音楽関係の夫妻、などなど一台のピアノの前に様々な人生、様々な生き方が登場する。単に人間模様を観察するドキュメンタリーとして試してみても、勿論素晴らしいが、それ以上に私には「普通の人の奥深さ」を映し出してくれているシーン、として映る。

かつこいい普通の人々

二十数年前、英国に子供を伴って主人と留学した。慣れない場所での暮らし、様々な英国人にお世話になった。大学、小学校に関連する人ばかりでなく、家の隣に住む人、家を

貸してくれた大家さんなどごく親しくお世話になった人も多い。その他にも、たまたま出会った人、子供の関連で友人になった人など、いわゆる社会の階層も様々であったが、笑顔と今生きている生活の中での品格があった。そうだ、あの時の英国人がまだ街にいる、という事がピアノのシーンでよみがえり、うれしかった。今は日本に暮らしているので、日本のことが客観的に見れないという事は確かにあるだろう。しかし教育、職業選択、価値観、生き方などが次第に画一化していく傾向が強い日本の社会をみていると、英国の粹（イキ）が懐かしくなる。ぶれない価値観、多様性、個性、金銭では図れない人生の価値などを人がわかっているかどうかである。多民族国家という社会の中で、教育や社会活動、何より家での普通の生き方を通して、英国人は彼らの文化や魂を守っているのかもしれない。その気質がEJを離脱してこれから、どのように粘り強さを発揮するだろうか、見守っていききたい。

夏目漱石の文学の中に登場する明治時代の普通の日本人は、それぞれの生活の中にその人の生き方や品格が感じられる。それは学歴、階層や職業によらない、生き方の中の「粹」があるからだと思う。私を含め今の日本人には少しづつ普通の品格、普通の教養、普通だけどかっこいい生き方が少なくなってきたように感じられる。普通に粹な日本人を何とか取り戻すことはできないであろうか、と思いを巡らしている。街の人達の生き方や教養が、結局はその国全体の将来、どのようになっていくかの方向性^①につながっていくように思えるからである。

英国の街角の駅ピアノだけではなく、番組では世界各地の駅ピアノ、空港ピアノの映像を通して、様々な人たちを紹介してくれる。世界中の街角で、様々な職業や暮らしをしている人たちが、それぞれの背景と共にピアノを演奏してくれる。それぞれに素晴らしい物語があり、その都度感動する。演奏者たちは全員が思い通りの人生を歩んでいるわけではない。いや、思い通りでない人の方が多いかもしれない。また、ITや金融など現代的な職業についている人で、日本でも働きすぎで問題となるような分野の人も多い。その人たちが昔習った、自己流で練習した、音楽の道を無念にも断念したなどの背景をさらりと告げて、今のピアノ演奏を披露してくれる。勿論、いい意味で彼らは今の自分を受け止めてくれる様子も感じられる。その生きざまがかっこよく、人としての器の広さを感じさせる。紹介される多くの国はGDPでは日本に劣るが、英国人に勝るとも劣らない粹な生き方を実践しているように見える。

たぶん、外国人から見ると「日本人もまんざらではない」と言ってくれるかもしれない。しかし、六十余年を振り返ってみると、そして周りを見てみると、普通の人々の「人としての深み」が少しづつ薄くなってきたように感じられる。時代を超えて普遍的に読み継がれてきた日本の文学に見られるような日本人の姿が、消えつつあるようで、焦りに似

かっこいい普通の人々

たもどかしさを感じる。

クールジャパンを地で行くような、かっこいい普通の日本人がたくさんいる街の復活を願っている。